

限られた環境を
活かして

アゲハチョウをもっと呼ぼう

社会福祉法人晴朗会 すくすく保育園（大阪府大阪市）[4、5歳]

事例1 アゲハチョウが園庭での主役に（青文字は園内の環境の見直し）

①今年も“休眠サナギ”が孵ったよ

4月中旬「アゲハチョウが生まれてる!」「休眠サナギが孵ったよ!」とみんなに大ニュースがもたらされた。昨年、休眠サナギは春になるとアゲハチョウになるということ、関心のある子どもは知っている。今年も心待ちにしていたので、さっそく、各組にニュースが伝わり、みんなで大喜びして見ている。「お誕生日、おめでとう!」「生まれてきて、ありがとう!」「今日は暖かいよ!」と声をかける。その日から、次々に休眠サナギがアゲハチョウになる。



②アゲハチョウをもっと呼ぼう

狭い園庭でも「蝶を呼ぼう」と、ジャバラ・ネブル・シークワサーの木の鉢植えを置いている。今年は、アゲハチョウをもっと呼ぼうとダイダイの木を追加する。しかし、今まであるミカンの木には、卵や幼虫もいるのに、ダイダイの木には、いつまでたっても卵もサナギも来ない。子どもたちも、保育者たちも「この木にはいないね」「どうしてかな?」と卵やサナギを探す時に気付いている。子どもたちは、「匂いが違うのかな」「卵を産みつけられた木が好きなのかな」「葉っぱの硬さかな」と疑問をもつ。



③ダイダイの木に幼虫がいる

台風が来る前に風の来ない所に鉢を移動させたので、元に戻す時に、ダイダイの木を他の鉢の真ん中に置く。その後、ダイダイの木に、幼虫が見つかるようになる。

<みんなで考えたこと>自分が育ったみかんの木にアゲハチョウが卵を産むので、最初はダイダイの木にはいなかったが、段々活動し出すと、近くにある木に移るのではないかと場所を入れ替えたことによって、ダイダイの木にも来るようになったのかな。

考察

限られた園庭で子どもたちの体験を豊かにするために、鉢植えで蝶を呼ぶ木を設定していることで、それぞれの木に注目することができ、幼虫の有無に気づき、疑問をもって考える体験につながった。

環境の工夫と子どもの姿（赤文字は変容）

サナギや羽化に注目する環境



表示に注目するだけでなく、この場所にサナギがいることにより、蝶（生物）がより身近になる。



羽化した蝶の写真や日付などを掲示したことで、いろいろな蝶の種類や蝶による模様の違いなどに比べて気づき、会話により共通になる。解決できない疑問について専門家に手紙を出す。(5歳)

ザリガニを身近に感じる環境



脱皮して弱っているザリガニを知らせる。



表示により情報が伝わることを体験していることで、ザリガニの脱走事件やクラスの出来事を自分たちでも伝える表示をする。(5歳)

テントウムシへの興味がわく環境



担任が子どもたちも興味をもてるように世話をす。誰もが気づき興味をもちやすい所に、飼育箱や絵本を設定する。(4歳)



テントウムシは1日に5~600匹のアブラムシを食べると知り、たくさん餌が必要なことに気付く。虫を嫌いと言っていたB児もテントウムシのいる公園でアブラムシを探すようになる。(4歳)

ポイント

鉢植えだからこそできる蝶を呼ぶ環境構成により、子どもは蝶の生態を考え合う体験をします。保育者の工夫により子どもたちは自然への興味を深め、探求心を発揮して環境に意欲的にかかわっています。広さも自然も限られた保育環境であっても、子どもが興味をもって注目し、遊びや生活に取り入れることのできるような工夫により、目の虫から、蝶の専門家、園内のいろいろな場所、園外の自然にまで考えは広がっています。